

平成9年(1997年)10月20日
第105回『21世紀塾』参考資料
(第6回提言)

21世紀の日本を救う為に

「大規模貸菜園」で高齢者の生きがいを

『21世紀塾』代表世話人 小野 徹

【問題提起】

今、日本を、我々を、元気なくさせている一番の原因は何だろうか？

いつまでたっても回復しない景気のせいもあるだろう。しかし、たぶんそれは、既に始まった医療費の負担増等、これからやってくる『高齢者社会』の到来に対する不安と、それをどうすることもできないイラ立ちではないだろうか。

現在、日本の高齢者は、「やっかいもの」、又は、これから「やっかいもの」になる存在とされている。

昔からそうだったのだろうか。――そうではない。昔は平均寿命が短かったことから、「老」となることは尊敬の対象であったし、高齢者の仕事も農業においては勿論、商工業も自営が多かったから、極端に言えば、死ぬまで働く場所も、仕事もあったし、貴重な労働力でもあった。

今はどうだろうか。ほとんどがサラリーマンで、否応無しに厳格な定年制の下で働いている。定年延長も提起されているが、企業は中高年のリストラに追われていて、それどころではない。

といった具合で、平均寿命が80歳になんなんとする喜ばしい時代になったにもかかわらず、家業を持たない大部分の高齢者は、働けるのに、働けない。働きたいのに仕事がない。その上「やっかいもの」とされているという、誠に気の毒な立場に立たされている。

推測だが、ご本人たちも、家で何もしないでブラブラしていたり、ゲートボールで少しばかり体を動かしたりしていることよりも、それぞれの体力に合わせて、家族や社会に貢献したい、何かしらの「生きがい」をもって生涯を終えたい、と思っているのではないだろうか。

それなら、家業に従事していて、定年制などには無縁な農家はどうなっているのだろうか。

ご存知の通り、農山村を守ってきた農家も、すっかり高齢化していて、農地に手が回らなくなる日もそう長くはないといわれている。

後継を期待された若者のあらかたは都会へ出てしまっているし、その上、もったいないことにコメ余りによる休耕田も多く、農村の荒廃は進んでいる。

都会や都市周辺部には、働きたくても働く場所がない「やっかいもの」の大集団があり、一方の農村には働き手がいなくなる矛盾。――これを放置していいのだろうか。

いっそ、単純にこれを結んだらどうだろうか。――つまり、農山村を都市部の高齢者に開放するだけで、高齢者には「生きがい」が生まれ、これからの高齢者には希望を与え、農山村は活気づき、日本には元気がよみがえるのではないだろうか。

農村には農業者を者を守るための様々な規則もあるようだが、農村自身を守るためであれば、例えば小作権の問題等、法制上の整備をすれば、かなり思い切った施策も可能となるに違いない。

その目玉として、ここでは、借りる側の趣味と実益を兼ね備えた「大規模貸菜園」制度を提言したい。

今までも小規模な家庭菜園は実施されている。しかしこれは、サラリーマンが休日を利用して、手入れや収穫をするといった1坪単位の小さなものであり、定年になった高齢者であれば、365日耕作できるのだから、100坪単位の大きな貸菜園とする。

365日といっても、耕作者は一切時間に縛られないのだから、行かない日ばかりでもかまわない。又、電車に乗って1日ばかりで出掛けて行ってもいいし、車を運転できれば、かなり奥地にも入れる。

敷地が大きすぎれば、気のあった友達同士で借りたっていいし、「別荘」代りに、年数を決めて、打ち捨てられた廃屋を借りたっていい。

田舎は空気もいいし、本人が「生きがい」をもって働くのだから、よけいに健康のためになるし、当然、かかる医療費だって少なくなるだろう。

一番の不安は、生まれてこの方、農業などやったことがない高齢者がほとんどだということだろう。それも、やりたくてもどこへ申し込んだらよいのかもわからない。

――しかし、そのために都合良く、全国どこにでも農協があるではないか。農協に「非農業者」へも支援・指導をしてもらおう。貸菜園の斡旋や、肥料、種、苗の斡旋、

その育て方などを指導してもらおう。

農業に従事している若者に教わったってよいではないか。彼らも教えることによって、尊厳を持つことができるだろうし、商売にもなるに違いない。

日本は、狭い国土だと言われている。しかし、それを更に狭くするような施策は、本当の無駄だ。

それを打破するためにも、21世紀の一方の「主役」である高齢者に、「大規模貸菜園」等に、眠っているパワーを存分に発揮してもらおう。

――高齢者が、自分で野菜を作って、家族とともに食べる。近所へも配ってやれば、「やっかいもの」どころか、周囲の誰からも喜ばれ、本人も嬉しい。

――農山村に、1年中人が入り込めば、農山村の荒廃どころか、整然とした緑の国土が復元するだろう。

高齢者のパワーで、21世紀を明るい未来としたいものだ。

中伊豆体験農園がオープン！



7月8日に、新山村振興等農林漁業特別対策事業による東部農林事務所管内初のラウベ（休憩小屋）付き農園施設である中伊豆体験農園がオープンし、開園式が伊豆市長をはじめ、管理主体である「中伊豆体験農園管理組合」、市及び農林事務所の関係者並びに農園利用者等多数出席のもと行われた。

式典は、テープカットに続いて、伊豆市長あいさつ、管理組合の紹介、来賓祝辞等があり、管理組合から「天城山と富士山に囲まれた絶好の自然環境のもと、人と人とのふれあいで楽しく運営していきたい。」と、また、農園利用者の代表者からは「地域住民とのコミュニケーションを深めながら、楽しい農園生活を送りたい。」とのあいさつがあった。

また、式典終了後には、記念イベントとして、サツマイモのつる挿し体験が行われ、さっそく地元民と利用者との”ふれあい”が図られた。

今後、当農園には、“体験、交流、情報発信”等をキーワードに、伊豆市が進めているグリーン・ツーリズムの拠点施設として役割が期待される。



平成18年7月にオープンした「中伊豆体験農園のHP」より